

---

# 仮面ライダーディケイド～軌跡の世界

マッチ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

仮面ライダーディケイド 軌跡の世界

### 【Nコード】

N49600

### 【作者名】

マツチ

### 【あらすじ】

世界を救う旅を続ける門矢士、光夏海、小野寺ユウスケ。彼らが訪れたのは《軌跡の世界》。自治州クロスベルを舞台に、仮面ライダーディケイドの戦いが今、始まるうとしていた！

## 軌跡の世界（前書き）

はじめまして。

作者のマッチと言います。

今回新連載を始めたのは《仮面ライダーディケイド》の《零の軌跡》とのコラボレーション。

世界観はあらずじにもあるようにクロスベル自治州　つまり零の軌跡を基準としていますが、主人公は門矢士。仮面ライダーディケイドです。

彼はあらゆるライダーの力を駆使し、クロスベルにうずまく数々の陰謀へ介入していきます。

同行者がどうなるかは……お楽しみです（笑）  
きっと読者の皆さんの予想を裏切れることでしょう。

一行メッセージでも、苦情でもなんでも感想は大歓迎です！

## 軌跡の世界

広い街道に声が響く。

「やっぱりこうなるのか。……変身！」

士は変身ベルトにカードブッカーから抜き出したカードを装填した。

『Kamen Ride』

そして、慣れた手つきでベルト中央のトリガーを閉める。

『Decade』

すると赤いデイメンションが士の周囲を取り囲み、一気に収束する。

それらは額に集まり、合体した。出現した緑の眼が妖しく光る。

【仮面ライダーディケイド】……世界を破壊するために生まれた最強のライダーである。

幾つもの世界を巡り、その瞳はなにを視る……。

一時間前

光写真館。

光夏海とその祖父が営業しているこの写真館に、門矢士はいた。

彼は椅子に深く腰掛け、目の前にある大きな水彩画を眺めている。

それは、大きな商業都市の全景らしきものと、その左右に暗黒が広がっているものだった。

影は幾色にも塗り分けてあり、その商業都市に数多くの陰謀がうずまいていることが隠喩されている。

「さて、どうしたもんかな」

彼 いや彼らは、多くの世界を旅している。

その世界の危機を救うのが仮面ライダーディケイドに隠された使命

だったからだ。

本来世界の破壊者であるディケイドは、世界を再生させることも出来る……。

そのことに気付いてからは、士自身もその使命を受け入れ始めた。彼は幾つもの世界を救っていったのだ。

そしてつい先ほども、とある世界を救ったところだったのだが……。「とりあえず、外に出るか。……たく、夏ミカンどもはどこに行きたんだ」  
そう。

旅の同行者である三人の姿が消えていた。

「ここは……外国か？」

士はとりあえず外にでることにした。

だが扉の外に広がっていた景色は、今までの世界とは毛色が違って  
いたのだ。

さつき眺めていた絵の都市そのものだったのだが、まるでヨーロッパのような、だけれど独特な街並みである。

少なくとも、言葉が通じるか心配になる程度は。

「……んで、俺は警察官、と」  
士の格好は世界を旅する毎に変化する。

料理人、修行僧、弁護士と様々だが、警察官は二度目だった。青い制服にホルスター。典型的だった。これは士の常識と合致している。

「さて……おいそこのガキ。ここらで匂を過ぎた夏ミカンを見なかったか？」

近くで店先の花を手入れしていた女の子に話しかける士。失礼極まりない話しかけ方だったが、少女は言葉を返した。

「なつみかん……？ モモそんなの知らない」

「確かに、桃がミカンの知り合いとは思えないな。ふざけてないで

答えてくれ」

「ふざけてないよ。モモはモモ。なつみかんさんなんて知らない」

「……そうか、じゃあな」

少女が夏海のことを知らないと見ると途端に踵を返す土。

土お得意のマイペースに巻き込まれたモモと名乗る少女は、土の背中を見送ると首を傾げて花の手入れに戻った。

「たく……」

街を巡って数十分。言葉が通じたのはいいが、住民のネーミングセンスからしてここが外国なのは間違いないようだ。

いくら話を聞いても手がかりを得られなかった土は、いつの間にか街の外に出ていた。

「う、うわ、来るな来るなああああああ！！」

目の前には逃げ惑う若い男性。

なにやらミノタウロスのような怪物にじりじりと追い詰められていた。

それから今に至る。。。

『Kamen Ride Decade』

変身を終えた土は、軽く首を回してから一気に怪物との距離を詰め始めた。

それに気付いた怪物は、攻撃の対象をディケイドへ変える。

「あ、あんた……?」

呆然とディケイドを見上げる若者に、怪物に組み付きながらディケイドが叫んだ。

「さっさと逃げろ！ 足手まといだ！」

「……あ、ああ……!」

かなり乱暴な物言いだだったが、若者は素直にその場から逃げ出した。

その直後、組み付きをほどいた怪物は強烈なナツクルをディケイドへ浴びせる。

「おわっ!!!」

不格好に吹っ飛ばすディケイド。

ダメージはそれほどでもなかったのか、ディケイドはすぐさま立ち上がりカードブッカーからカードを抜き出した。

独特のドロー音と共に抜き出されたそれには、剣のような絵が描かれている。

余裕ありげにそのカードの側面をトントンと叩くと、ベルトへ装填した。

『Attacku Ride』

変身の時と同じくトリガーを閉める。

『Slash』

カードブッカーが変形し、取っ手と剣身が出現した。

その剣で華麗に怪物を幾度も斬りつけるディケイド。

怪物はその威力に思わずよろめく。その隙を見逃さず、ディケイドはひととき強く斬りつけた。

数歩後ろへよろめく怪物。ゆっくりと体勢を立て直し、その場で唸ってディケイドを威嚇し始めた。

更にカードを抜き出すディケイド。素早くベルトへ装填し、トリガーを閉めた。

『Final Attacku Ride D D D Deca

de』

「はッ!」

五枚のカード型ディメンションが怪物に向け出現した。ディケイドがジャンプすると、それに合わせカードも上昇する。怪物とディケイドを結んでいるのだ。

ディメンションにロックされた怪物は思うように動けない。

ディケイドは空中で姿勢を変え、ライダーキックを放った。

ディメンションを通り抜ける度にディケイドは加速し、最後のディ

メンションを通り抜けたデイケイドは怪物を貫く。

直後、怪物は爆散した。

「…………ちっ…………」

首尾良く怪物を片付けたデイケイドだったが、なぜだか舌打ちをする。

デイケイドの視線の先、さっき倒したばかりの怪物と同じ怪物が三体、姿を現していた…………。

## ファイズと少女

「……………厄介だな……………」  
数の多い敵を一度に倒す手段が無い訳ではない。  
ただ、それを繰り返す隙を与えてくれるかが問題なのだ。  
見たところ、目の前の怪物たちは今にもこちらへ飛びかかろうとしている……………。  
どうしたものか悩んでいた、その時だった。

「うおりゃああああああ！！！」

盛大な掛け声と共に、小柄な人影がディケイドを通り過ぎ怪物たちへと得物を叩きつけた。

その一撃は当たりこそしなかったものの、大きく大地を揺らす。

「あんた！ 今の内に逃げて！」

一瞬だけ振り向いたその人物はかなり若い女の子だった。

恐らく先ほどの一撃からして彼女は相当な実力者のようで、ディケイドを助けに参上したようだが、その時には既に、ディケイドはカードを装填していた。

『K a m e n R i d e F a i z』

赤色灯のようなラインが体中を覆うように広がり、一本の線で結ばれた瞬間、黄色の眼が瞬く。

スマートブレイン社が開発した対オルフェノク用パワードスーツ…

…仮面ライダー555に士は変身していた。

「……………え、え！？ あ、あんた一体……………」

怪物たちと戦闘を繰り返しながらも、今まで見たことがない光景に目が釘付けになっていったようだ。

「数には数……………と言いたところだが、生憎余裕が無いもんでな。

おいお前、さっさとそこを離れろ」

さつきは助けられたのに随分と偉そうな口振りである。

「で、でも……」

戦闘を続けている彼女。どうやら、ディケイドを非戦闘員と思い込んでいるらしい。

このままでは彼女がやられかねない。

「たく……いいから離れる！」

……まるで聞き入れない。

埒があかないと悟った555は、余計に一枚多くカードを装填する羽目になった。

『Attack Ride Burst』

携帯型特殊銃を取り出した555は、怪物たち一体に一発ずつ、計三発の銃弾を浴びせた。

もともと三連射型の銃なため、手間がかからなかったのは幸いだったが。

予想外の距離から攻撃された怪物たちは、本能的に555へ勢い良く走り出す。

突然銃を撃ち出したことに驚きが隠せない様子の少女。

走る怪物たちを見送りながら555へ叫ぶ。

「ちよ、あんたホントに何者!？」

「そいつは今聞くな! ってああ、んなこと言ってる場合じゃねえんだよ!」

『Form Ride Faiz Axel』

これはフォームライドカード……各仮面ライダーの形態を変化させて戦うためのものである。今回使用したのはアクセルフォームへと変化するためのカードだった。

555の体の各部分がリミッター解除され、銀を基調としたアクセルフォームへと変化する。

「ま、また……!」

またもや驚いている少女は無視し、左腕のスイッチを押し込む。

『Start Up』



## ファイズと少女（後書き）

今話で登場した『Attack Ride Burst』ですが、  
使いどころが少ないんですよね。

頑張って三連射式なのを上手く活用したつもりです

## 士とエステルの昼下がり

「なるほどな。大体分かった」

クロスベル西通りのパンの小売店、ベーカリーカフェ《モルジユ》に士は訪れていた。

小売店とは思えないほどの敷地の広さを誇り、西通り随一の味ということもあって大人気のパン屋だ。

特徴としては、テーブルとイスが置かれたオープンカフェがあるところだろうか。

今、士はそのイスに深く腰掛け、背もたれにもたれかかり、店内で注文したエスプレッソを飲んでいた。なんだかとても香ばしく、つい今までの人生を邂逅してしまい、それが重いものだど気付かされるような味だった。

「つまり、この世界も他の世界と同じくごたごたしてるってとこか」  
士の目の前、テーブルを挟んだ向こう側のイスに座っている少女にそう答えた。

彼女は先ほどデイケイド　士を助けてくれた女の子である。

「うえ、苦っ……。でもなんだか懐かしいような……」

「……聞いているのか？」

「え？ あ、ごめん。なに？」

「……どうやら、脳天気なやつのようなだ。」

士は呆れた表情を浮かべながら、先ほど言ったのと同じ言葉を繰り返した。

彼女はトマトバーガーを不満をこぼしながらもなんとか平らげるとこう言った。

「ごたごたって……まあその通りなんだけどさ、もうちょい詳しく知りたいか思わないの？」

「思わないな。あと、俺はお前よりも年上だ」

「あ、そういえばまだ名乗ってなかったわね」

「……」かぶりを振る士。どうやら敬語で話させるのは諦めたようだ。

「あたしエステル。エステル＝ブライト。あなたは？」

「かどやつかさ門矢士だ。いや、お前から風に言うなら、士門矢だな」

街の外に出てしまう前、聞き込みをしていた時にどうやら名前が姓よりも頭にきているらしいことが想像できていたため、名前が士であることを強調しておいた。

「?? 士でいいのよね？」

「ああ、それでいい」

「分かったわ。……それじゃあ逆に質問するけど、あんた一体何者なの？」

「見て分からないか。警察官だ」

「違うわよ。なんで姿が変わったりするのって聞いているの」

「……ああいうのは見たことがないのか？」

「あるわけないでしょ」

士はこう思った。実に厄介だ、と。

どうやらこの世界には仮面ライダーが存在しないらしい。以前にもそんな世界があったが、そこでは仮面ライダーが必要とされておらず、排他されてすらいた。

つまり、この世界でも仮面ライダーが邪険に扱われる可能性が充分にある。

この世界を救う要因となるものは未だ判明していないが、いずれにせよ邪険に扱われるのでは行動しにくいのは事実だ。

彼女 エステルがただ単に仮面ライダーのことを知らないだけで、実は存在するのなら話しは別だが……。

「なに考えごとしてるの？」

きよとんとした目で士を見つめるエステル。

とりあえず、この世界のことをもっと知らなければならぬ。

なにせ自分は、今は一人なのだ。

夏海やユウスケを探し出す必要もある……。

「……その内帰ってくるか」

……無いようだった。

「え？」

声が聞き取れず、土に聞き返すエステル。

「独り言だ。それより　この世界のもっと詳しい話が聞きたい」  
土は思わず身を乗り出してそう聞いていた。

エステルの話を簡潔にまとめるところだ。

ここはゼムリア大陸の西部に位置する貿易・金融都市クロスベル

またの名をクロスベル自治州。

ここクロスベルは、エレボニア帝国とカルバード共和国という二大国に挟まれており、かつて熾烈な領土争いの対象となっていたが、一昨年リベールという小国において締結された『不戦条約』によって緊張状態が大幅に緩和された。

結果二大国に挟まれているクロスベルは巨大貿易都市に発展し、高層ビルや導力車、導力ネットワークなどの新たなインフラが次々と導入されていった（ちなみに導力というのは土の世界でいう電気のようなものらしい）。

一方でマフィアが存在や密貿易、違法なミラ・ロンダリング（ミラはこの世界の通貨）などの問題を抱えてしまっている。

つまりここクロスベルは、急速に発展しすぎたため、様々な問題が存在しているとのことだった。

「……大体、分かった」

「……頭痛そうだけど……大丈夫？」

土は慣れない聞き手に徹したため偏頭痛を起こしていた。

いつもは適当に聞き流していた説明がこんなにも辛いものだったとは……。

「……問題ない。……ところで、お前は何者だ？　なぜあの場に来た？」

「ああ、それを言っただけだったわね」

エステルは長い髪を右手でかきあげるところ言った。

「あたしは地域の平和と民間人の保護のために働く民間団体、遊撃士協会の者よ。みんなからは『遊撃士』<sup>ブレイサー</sup>って呼ばれてるわ」

「じゃあ、さつきも民間人の保護とやらをすることであったのか？」

「たまたま通りがかったただけだけどね。あんたこそあんなとこで何してたのよ？」

「歩いていたらいつの間にか街の外に出てしまっただけ……。怪物に襲われていたやつがいたから仕方なく助けたんだ」

仕方なく、と言うあたりが実に土らしい発言だった。

「……へー……意外といいやつなのね」

「……」

こいつは喧嘩を売ってるのだろうか……？

士がそう思っていた、まさにその時。

士を遠くから凝視している黒髪の青年の姿があった……。

## ヨシユア、仮初めの決意

彼の名はヨシユア＝ブライト。

普段は優しい微笑みを携えているはずの端正な顔は、今は無表情となっている。

「あいつがディケイドか……？」

ヨシユアはそう呟くと、ゆっくりと歩を進めながらついさっきの出来事を心の中で反芻していた……。

「ここは……？」

ヨシユアは見たことのない亜空間のような場所に立っていた。

先ほどまでクロスベル市内を歩いていたはずなのだが……。

「ディケイドが、遂にこの世界にもやってきてしまった。この世界も破壊される……」

「ッ！？」

背後に人の気配。

振り返ると、そこには茶色のロングコートに帽子をかぶった中年の男性がいた。僕に気配を悟られず後ろに立つとは……何者だ？

「いや、この意識そのものが幻術である可能性も……」

「幻術なんかじゃない。これは紛れもない現実だ。現に」  
そう言つて、男性は手を地面へかざす。

そこへ突如出現する映像。

そこには、見知らぬ男と……

「キミのパートナーが危険に晒されている」  
僕のエステルがいた。

エステルは僕の知らない男と楽しそうに話をしている。  
誰なんだ、この男は……。

「その男は仮面ライダー・ディケイド。世界を破壊する者だ」  
ディケイド……。

……いや、……落ち着け。

なんらかの精神作用が働いているようで頭が上手く回らないが、この状況が明らかに不自然なのは確定事項だ。

この男の話が本当である保証なんてどこにもないし、さっき疑ったようにそもそも幻術にかかってしまった可能性もある。

「いいのかい？ 大切なキミの太陽を失うようなことになっても

」

「!?!?」

「かつて悪い魔法使いから救った彼女を守らなくていいんだね？」

……この男は僕の過去を知っているようだ。

そんな人物は相当限られてくるし、幻術にかけられているなら術者はその内の誰かでなければならぬが、その可能性はゼロに近い……。

これが仮に幻術であるなら相当高度なものであるからだ。

耐性のある僕でも抜け出せないような幻術が使えて、僕の過去を知っている人物……そんな人は存在しない。

「そう。これは現実だ。そして、今、破壊者の魔の手がキミのパートナーに迫っているのも事実なんだよ」

「……」

「彼は放っておけば世界を破壊する……。非常に危険な存在だ。キミの彼女を守るためにも、ディケイドを倒すのだ……」

「ディケイドを……倒す……」

だんだんと瞳を濁していくヨシユア。かつての好青年の面影は微塵も感じられない。

「期待しているぞ……ヨシユア・ブライト」

そう言い残してその場を去ろうとした男だが、ヨシユアに呼び止め

られる。

「あなたは……一体？」

ヨシユアがそう尋ねると、男は背中をこちらに向けたままこう答えた。

「私は鳴滝なるたき……この世界の命運はキミの手に懸かっている……」

男が言い終えた瞬間、視界は白い光に遮られる。

気がつくと、ヨシユアはクロスベルにぼーっと突っ立っていた。

「……僕のエステルを……誰にも傷つけさせはしない……!!」

彼は人知れずそう呟くと、先ほどの映像に映し出されていた場所へと向かった。

「……ヨシユア？」

エステルが士の背後側を遠くに見据えながら呟いた。  
どうやら、知り合いでも発見したらしい。

士はイスに左腕を乗せて振り返った。

「……知り合いか？」

こちらへ向かってゆっくり歩いてくる人物が一人。エステルが言ったのはあいつのことだろう。

「うん……。でも、なんだか様子がおかしい……」

「……？」

そんなやり取りをしている内に、彼はもうすぐそこに来ていた。エステルのおそばに寄り、心配気に話しかける。

綺麗な琥珀色の瞳をした美青年だった。

「エステル……大丈夫だったかい？ 怪我はない？」  
妙だった。

エステルが怪物と戦ったことを彼は知らないはずだ。  
なのに怪我の心配をしている？

……もしか、俺といたからなのか？

士がそう考えていると、エステルがヨシユアに言葉を返した。

「うん、大丈夫だけど……どうしたのヨシユア？ ……変だよ？」

「変なんかじゃないさ。……ちよつといいかい」

そう言うと、エステルのそばに立ったまま土へ視線を向けて喋り始めた。

「……あなたがデイケイドですか」

「……俺はこの世界でも人気者なんだな」

いつものように茶化す土。新たな世界に着いた時は、なぜか自分の名を知られているのだ。

誰の仕業なのかは大体分かるが……。

「去ってください。ここはあなたのいるべき場所じゃない」

「生憎だが、帰り方を知らない。俺だって自分の世界に帰りたいたいだ」

「……つまり、ここに滞在すると？ 破壊者であるあなたが？」

「しばらくはそうなるな」

そんな土とヨシユアを、不安げに交互に見つめるエステル。

土はそんなエステルに気がついていたが……そばにいるはずのヨシユアには見えていなかった。

「では……僕は手段を選びませんよ」

「……お前に俺をどうこう出来るわけ無いだろ。それでもやるなら受けて立つが？」

「……付いてきてください」

土に背を向けるヨシユア。どうやらこれから、勝負が出来るような場所へ誘導するらしい。

そんなヨシユアにエステルが呼びかけた。

「ヨシユア！ どうしたのよ！？」

ヨシユアは肩越しに振り返り、こう返した。

「心配いらないよ、エステル。君は僕が守る」

「……どうしちゃったのよ、ヨシユア……！ ねえ！ しっかりしてよー！」

エステルはヨシユアの後を追いながら懸命に呼びかけ始める。  
そんな二人の後を追う形で、士もイスから立ち上がりゆっくりと歩  
き始めた……。

## 破壊者と漆黒の牙の舞

「……ここはジオフロントです。既に導力ネットワークの製備が終わっているため、誰かを巻き込むこともないでしょう」

導力ネットワークを利用するには長大な有線が必要で、その配備がここジオフロントで行われたとのことだった。

確かに人の気配はない。

「デイケイド……ここであなたを倒します」

そう言うヨシユアに不穏なオーラが宿る。どうやら、本気でかかってくるようだ。

「ねえ、ヨシユ……」

彼を制止させようと再び呼び掛けようとしたエステルだったが、彼の正面に回った瞬間体が硬直した。

「……？」

頭に疑問符を浮かべる土。

エステルは一步、二歩と後ずさる。その目はヨシユアの瞳に据えられたまま。

「い、……嫌……」

そしてぺたんと尻餅をつき、口をパクパクさせた。

……明らかに様子がおかしかったが、ヨシユアは気遣う素振りすら見せない。

土はそんなエステルをチラリと確認すると口を開いた。

「俺は人間を攻撃しない主義なんだが？」

「僕たち遊撃士は対人、対魔獣の戦闘を考慮した装備をしています。

……気遣う必要はありません」

「……そういうことなら話は別だ」

ヨシユアは腰から二本の剣を抜き出し、両手に構える。

「行きますよ、デイケイド」

そう言う彼には一分の隙も無かったが、全く怯むことなく、むしろ

余裕の笑みを浮かべる士。

「勘違いするな。俺はディケイドである前に  
カードをドロースる士。」

その右手を顔の前に持つていく。

カードにはディケイドが描かれていた。

「通りすがりの仮面ライダーだ！ ……変身ッ！」

『Kamen Ride Decade』

カードをベルトへ装填する士。

デイメンションがいくつも現れ、それが額のあたりに収まると緑の眼が妖しく光る。

士は仮面ライダーディケイドに変身した。

それを見て、やはりヨシユアも驚きを隠せないようだ。

「なっ……！？」

「悪いが、一気にやらせてもらっせ」

続いてドロー。

そのカードには銃のようなものが描かれている。

またも余裕ありげにそのカードの側面をトントンと叩くと、ベルト

へ装填した。

『Attack Ride Blust』

ブッカーが変形し、銃型に変わった。

ディケイドがその引き金を引くと、いくつもの銃弾がヨシユアへ向かって吐き出される。

「くっ！」

ヨシユアは得意のスピードで銃弾の群れから離れると、超高速で自身の残像 分け身を作り出した。

「！？」

驚きが思わず引き金を引く指を止める。

その隙を見逃さず、幾人ものヨシユアがディケイドに切りかかった。ヨシユアのスピードに反応出来ていなかったディケイドはもろにその攻撃を受けてしまう。

「ぐあつ！」

体に火花が散り、衝撃で吹き飛ばされるディケイド。追い討ちをかけるかと思いきや、ヨシユアは分け身とともにディケイドの様子を窺い始めた。

恐らく、初めて戦う相手であるため慎重になっているのだろう。

これはディケイドにとってはまさに僥倖であった。

なんとか立ち上がると、手をパンパンと払う。

ヨシユアに向かっておどけるように人差し指を向けると、こう言った。

「そういうの、俺も使えるぜ？」

『Attacku Ride Illusion』

そう言つて、ディケイドはカードを装填……アタックライド・イリユージョンを発動した。

七色のホログラフィックエフェクトが瞬くと、そこに何人ものディケイドが現れる。

それらのディケイドたちは、各々剣や銃を構えヨシユアへ突撃していった。

「はっ！」「らあつ！」「りゃあ！」

分け身を次々と消滅させ、本体に迫るディケイドの分身。

「対集団戦は僕の特化項目だ」

その声が聞こえた時には、ディケイドの分身は全て斬り伏せられていた。

ヨシユアは一瞬の内に分身全てを一掃したのだ。

この速さ……スピードこそがヨシユア最大の武器と言える。

「……やるな、お前」

ディケイドはヨシユアを今まで侮っていた。

それもそのはず、生身の人間と戦ったことがディケイドにはなく、ゆえにこれほどまで強いことを予想出来なかったからだ。

逆に言えば、ヨシユアは仮面ライダー並みに強いともとれる。

「なら……本気でいかせてもらおうぜ！」

『Kamen Ride Kabuto』

ディケイドがカードを装填すると、その姿が変わり始める。

頭頂部にはカブトムシのような角が生え、全体はよりスタイリッシュなフォームとなった。

高速で行動する怪物フォームに対抗するために人類が開発した仮面ライダー……カブトに士は変身する。

「いや……」

「スピードには、」

そう言いながらカードを構えるカブト。今までは直接装填していたそのカードを、まるでランプを持つように人差し指と中指の間に挟み、顔のあたりまで上げた右手からベルトへ投げ入れた。

『Attacku Ride』

トリガーをゆつくりと閉める。

「スピード、だろ？」『Clock Up』

その瞬間、カブトの姿が消えた。

正確には あまりの速さに視認出来なくなった。

つい前の戦闘で使用した555・アクセルフォームは自身のスピードを高めるものだが、このクロックアップは違う。

自分の時間の流れを速くするのだ。

「……いやだよ……」

一気にヨシユアとの距離を詰めたカブト。  
棒立ちのヨシユアに格闘を仕掛けようと、右拳を振り上げた。  
が

……その拳は、誰もいない空間に振り下ろされた。

「……………僕がこのスピードについてこれない!?」

背後からヨシユアの声。

超高速のカブトに、その声ははっきりと聞こえた。

つまりヨシユアは、カブトのスピードについてきているのだ。

それどころか、背後を取られたからには上回ってすらいる……………!?!?

## 太陽の涙

「うおおおおおー!!」

「くっ……」

カブトと高速戦を繰り広げるヨシユア。

カブトのスピードよりも若干ヨシユアの方が上回っているようだ。

ジオフロント内のいたるところで火花が散り、叫声が聞こえ……ようやく二人は止まった。

「はあっ……はあっ……!」

カブトは限界が来たのか、変身が解除されデイケイドに戻ってしまった。

対するヨシユアは悠然と立っていた。ダメージはほとんど無いようだった。

「世界の破壊者と言うからどれほどかと思えば……たいしたこともない」

そう言うヨシユアの瞳は、初めて見たときと違いひどく濁っていた。まるで人形のようなその瞳に見据えられると、背筋が凍るようだ。デイケイドはなんとか立ち上がり、ヨシユアに向かってこう言う。

「……言ってくれなせ。……じゃあ次で最後だ。お互い派手に行こうぜ」

「……分かりました」

これ以上長引かせると不利だと判断したか……あるいはヨシユアの様子に思うところがあったのか、ラストバトルを提案したディケイド。

ヨシユアはそれに応じ、二刀の剣を構えて開戦時よりも大きな黒いオーラを纏った。

「はあああああああ！！」

対するディケイドはカードをドロし、確認もせずベルトへ装填する。

『Final Attack Ride D D D Decade』

ディメンションが五枚出現し、ディケイドとヨシユアを結んだ。そのディメンションに向け銃型ブツカーを構えるディケイド。銃口の先には剣を構えるヨシユアがいる。

「いやだあつ……!!」

「はあッ!」「うおおおおおお!」

ディケイドは引き金を引き、ヨシユアはディケイドへ一直線に走り始める。

実力が拮抗した者同士、互いの力がぶつかり合うかと思われた。だが

「いやだよ、ヨシユアあっ！」  
まさにその瞬間、今までへたり込んでいたエステルがヨシユアに飛びかかった。

ヨシユアは驚く暇もなくエステルの勢いに押され、体勢を崩して横っ飛びに吹っ飛ぶ。

その際に取り落とした双剣はデイケイドの放ったファイナルアタックライドに命中し、激しくスパークしたかと思うと爆発が起きたのち、吹き飛ばされた。

その激しい衝撃で生まれたパワーにより、双剣はものすごい勢いで壁に突き刺さる。

それを見届けたデイケイドは、ヨシユアに馬乗りになった……エステルに視線を移した。

「いやだ……いやだよ、ヨシユアあ……」

呆然とした表情のヨシユアの頬に、キラキラとした水滴がぽたぽたと落ちる。

ヨシユアが視線を上げると、涙を流すエステルと目が合った。

「お願いだから……そんな目をしないでよおっ!!」

そう叫んで、エステルはヨシユアに抱きついた。

頭を交錯させる形で抱き合った二人は、互いの顔を見ずとも、互いをものすごく身近に感じていた……。

「エステル……」

そう呟いたヨシユアの瞳に、光が宿っていく。

……すると、ゆっくりとした動きで右手を自分の身体の上にいるエステルの頭に持って行き、その手で優しく髪を撫でた。

「……ヨ、シユア……?」

抱き付いたままヨシユアの耳元で囁くエステル。

「…………ごめん、…………エステル…………もう、大丈夫だから…………」  
その声を聞いたエステルは、ゆっくりとヨシユアから顔を離して目を見つめる。

…………そこにいつものヨシユアが戻ってくれていたのを認めると、瞳から再び涙を溢れさせた。

「ヨシユアあっ…………!!」

またも勢いよく抱き付くエステルを見て、デイケイドは変身を解除する。

全身の装甲はどこへともなく消え去った。

…………その手にはいつの間にか土愛用の二眼レフカメラが握られている。

そのカメラのつばをいじりゆっくりとピントを合わせると…………パシヤリ、と一枚の写真を撮った。

「…………いい絵になりそうだ」

その写真の出来を想像し、嬉しそうに微笑む士。

地下深くのジオフロントに、ただエステルの泣き声が響いていた…………。

## 太陽の涙（後書き）

今話から執筆の仕方を変えてみました。  
見やすくなっていたら幸いです。

## 話し合い

「さあ〜て……そこまで言っなら本気出させてもらっわよ?」  
エステルは、自身の丈をゆうに超える得物　長大な棒を土に向け、  
構えた。

「僕も手加減しません」

油断無く双剣を手に取るヨシユア。  
並んだ二人に向かい合う形で堂々と立つ士は、慣れた手付きでカードを目の前に持って行った。

「さっさとかかってこい。五分で終わらせてやるよ　変身ッ!」

『Kamen Ride Decade』

ディケイドは赤いディメンションをまといながら走り出した。

世界の破壊者、ディケイド。

いくつもの世界を巡り、その瞳は何を視る……。

「で」ずいつと顔を近づけるエステル。対する士は動じることなく次の言葉を待った。

「あなた一体何者なの？」

これで何度目になるのだろうか。そんなことを思いながら、エステルの両肩を両手で押して近づけていた顔を引き離れた。

「言っただろ。破壊者であり、仮面ライダーであり、警察官だ」

「もー。それじゃ訳わかんないっての」

「あとお前らよりは年上だ」

「それで、士。とりあえず……」

「……」  
言葉が通じていないのだろうか。

現在、士とエステル、ヨシユアは三人並んで駅前を歩いていた。

士としては並んで歩く理由は無いのだが、どうもヨシユアが士に聞きたいことがあるらしい。その話を聞くために、《ギルド》に向かっているところだった。

ちなみに士には、どこにあるのかはもちろん、どんな建物なのか見当もつかない。

「しかし……不思議だな。名前も街並みも外国風なのに日本語が通じるとは」

「？ 日本……？」

「聞き流せ」

士の眩きに疑問符を浮かべるエステル。

正直な話、そんなに知りたいことでも無かったためすぐに質問を取り下げた。

まあこんな世界もあるんだろう……そう思うことにする。

「士さん。正面のあの建物が《ギルド》　遊撃士協会クロスベル支部です」

ヨシユアが指差す先、多くの同じような建物に挟まれるようにしてギルドはあった。

正面には【遊撃士協会】と書かれた看板が横向きに立てられている。クロスベル駅前をぬけ、東に走る通りを歩いたところでギルドは見えたと。

どうもここ周辺はクロスベルの東街区と呼ばれているらしい。

「さあ、中へ入りましょう。ついてきてください」

「で」

顔を近づけはしなかったものの、先ほどのエステルと全く同じ調子で話を士は切り出した。

「話したのはなんだ？」

現在、ギルドの二階のイスに士とヨシユアが腰をかけていた。ちなみにエステルは一階受付のミシエルという婦人に事情を説明しているようだ。どんな事情かは知らないが……。

「まず一つ。あなたはどこから来たんですか？」  
深刻そうな表情で疑問を投げかけるヨシユア。

「俺の世界からだ」

……相変わらずの調子の士。

そんな土相手にもペースを崩さないヨシユアは、最大限の解釈で問い返した。

「……ではあなたは世界を歩き来している……ということですか」

「その通りだ。話しが早くて助かる」

「……二つ目です。……なぜ姿が変わるんですか？」

「仮面ライダーだからな。原理は知らん」

「……仮面ライダー……とは？」

「戦う戦士だ」

「……では三つ目。なぜこの世界へ来たのですか？」

「さあな。この世界が困ってるからじゃないのか？」

「……ではよ」

「くどい。質問は三つまでって相場を知らないのか？ 第一俺は質問するのもしられるのも嫌いなんだ。今日はこれまでだ」

「実際には四度していましたが……」

「細かいことは気にするな」

そんな折り、先ほど士とヨシユアが昇ってきた階段からエステルが声がした。

「やつほー！ 話進んでるー？」

そのまま遠慮なく士の隣りのイスに腰掛ける。ヨシユアの隣りに座るものだと思っていた士は、正直驚いたようだ。

だが士はすぐに気を取り直し、エステルに言葉を返した。

「ほとんど終わった。こいつは話しが早くて本当に助かる」

「……」

……無言で黙り込むヨシユア。

「ふふん、ヨシユアはすごく話し上手なんだから。当然よ」

傲慢な表情で語り出すエステル。実に親バカな顔だった。まるで息子を自慢する母親のようだ。

しかし、そんなエステルの表情には、普通の女性とは違ったなんらかの魅力があった。

彼女特有の、まるで周りを明るく照らし出すような　そう、皆さんと輝く

「……なに？ 士、どうかした？」

そんなエステルの表情を見て……士は一人の女性を思い浮かべていた。

エステルとは話し方やテンションがだいぶ違うが　彼女もエステルと同じように周りを明るく照らし出すような人だ。

士は、思わず……エステルとその女性の顔を重ねる……。

「夏海……」

「……へ？」

その瞬間、目の焦点がエステルに合う。

内心では夏海の名を呟いたことに動揺していたが、土は冷静にこう返した。

「なんでもない。気にするな」

その声を聞いて、エステルは首を傾げたが、ヨシユアはより思案に更けるような表情をした。

しばらくはなにかを考えていたようだったヨシユアだが、やがて土にこう問いかけ始める。

「事情があまりのようですね。……よろしければ、話してくれませんか？」

「……………ああ」

## 賑やかに行く

しばらくして士があらかたの事情を話し終えると、エステルはその華やかな表情を曇らせた。

大切な人がいなくなる辛さ　それを彼女は知っていたからかもしれない。

「とまあ、そういうわけだ。俺はこれからあいつらを適当に探すつもりだ」

いつものように不遜な態度で話す士だが、どこかその表情は強がっているようにも見える。

やはり心配なんだな……。

ヨシユアはそう考えると、決心したように口を開いた。

「そうですか。……ではその人探し、僕たちに手伝わせて貰えませんか？」

「……は？」

珍しく疑問符のみで答えた士。横でエステルが「それいいわねヨシユア！ あたし乗った！」とか言っていたが、無視してヨシユアに聞き返す。

「どうしてだ」

ヨシユアは妙に落ち着いた調子で話し始めた。

「まず、僕たちは遊撃士協会という民間人保護を目的とする団体に

所属しています。行方不明のあなたのお仲間を放っておくことは出来ません」

「……それが理由か？」

士は自己意志で行動しない人間が嫌いだ。

ヨシユアが『職務』として夏海たちを探すというなら拒否するつもりだったのだ。

「他にも、僕に催眠効果を与えた人物のことが気になりますし

どうもあなたに恨みでもあるようでしたが。あの時は助けてくれて本当に感謝しています」

「結果論だ。別にお前を助けるつもりでやったわけじゃない」

……またあの男か。

その人物の顔を思い出し、頭を振る士。

「それに、あなたには借りがあります。エステルを救い……僕を救ってくれたんですから」

「あ、あのときは……別に士がいなくてもあたしが魔獣なんかどーにかしたっての。第一助けに入ったのはあたしよ？」

「結果的には助けられたんじゃないか」

「む、むう……」

ヨシユアの返しにむくれるエステル。

その顔があまりにも面白く、士は思わず吹き出してしまった。

「……くくっ」

「あー！ 今笑ったわね士！？ 乙女の顔見て笑うなんて信じらん

ない！」

「誰が乙女だ」

「あ、あんですって〜!?!」

エステルは自身特有のセリフを吐くと、横の土に掴みかかろうとする。

それを片手で捌いてあしらう士。

そのシユールな光景に、思わずヨシユアまでもが破顔した。

「ははっ……」

「もっつ……ヨシユア〜!」

そんな彼を見て、エステルは標的をヨシユアに移す。

「くぬっ、くぬっ!」

「ごめんエステル、つい」

そうは言っていたが表情は変わっていない。それどころか、笑みはますます深まっているようだ。

悪くない。

士は先程のヨシユアの案について考えていた。

……こいつらと一緒に行動する必要性は高い。

人探しの専門家を名乗るくらいならその実力は充分にあるだろうし、この世界の怪物……先程エステルが《魔獣》と言っていたか。そいつらと戦うにもこの二人は頼りになりそうだ。

魔獣に先制をかけたエステルの姿と、自分と戦ったヨシユアを思い出す士。

それに

士の脳裏に、今までの世界が思い起こされる。

賑やかなのは。

馴れ馴れしく慕ってくるカズマ。龍騎とナイトと力を合わせた瞬間。相変わらぬユウスケ。スマートブレインハイスクールの写真部での雑談。おでん屋での食事。シヨウイチとの噛み合わない会話。決めポーズをする電王。巨大な蟹を全員で倒したあの時。

じいさんにユウスケ、ついでに海東、そして夏海との食事。  
そこで笑っている俺

40

「嫌いじゃないからな」

「……へ？」

ヨシユアに殴りかからんとする姿勢のまま、士に振り返るエステル。  
ヨシユアも士に顔を向けた。

「いいぜ、乗った。しばらくお前らと一緒に行動することにする」  
そこで言葉を区切り、にやりと二人に向けて笑った。

「これからよろしく頼むぞ。……エステル、ヨシユア」

……二人はしばらくぽかんとしていたが、やがてこう言った。

「うん」

「もちろんです」

穏やかな昼の空は朱を帯び始め、ギルドを赤く照らしていた…。

賑やかに行こう(後書き)

ついに行動を共にすることを決意する士。

タイトルに「おや?」と思ったあなたは空の軌跡マニアです! (笑)

## 賭けられた遊撃士資格

「《協力者》？」

一通り話しをし終えた士、エステル、ヨシユアの三人は、二階から一階へと降り、受付の前に立っていた。

向かって左から士、ヨシユア、エステルといった具合に並んでいる。「そ。あたしたち遊撃士と、一般の人が一緒に行動するには、その地域のギルドで《協力者》になる申請をしなくちゃいけないのよ」右端にいるエステルが、カウンターに両腕をつきながら士に視線を向けて話す。

「遊撃士はその性質上、民間人の手を借りることが少なくありません。これはその時のための書類上の手続きのようなものです」

エステルの説明を補足するヨシユア。

そう。これから士はエステルたち遊撃士に同行する。

遊撃士としての職務を行う過程で、いなくなった夏海たちの情報が得られるかもしれないし、なにより士が彼らに興味があったからだ。そのためには協力者にならなければならないのだが。

「面倒くさいな」

左端の士もエステルと同じくカウンターに両腕をつきながら言った。

「第一俺が協力者だったのが気に入らない。お前らが俺の協力者だろっ」

まるで自己中心的な発言をする。自分最強の考えを持つ（？）士は、自分が協力者であることが気に入らなかつたようだ。士の妙なまでの自己主張力は時に厄介だ。

それに対し、エステルが「はあ……」とため息を尽いた。

「ですが士さん、それでは……」

「分かってる。要するに、俺がお前らと同じ立場になればいい話だろっ?」

「……………はい?」

士の言っていることの意味が分からないように首を傾げるエステル。そんなエステルを尻目に、士はカウンターに両手を、バンと音を立ててついた。

そして余裕しゃくしゃくのあの笑みでこう言ったのだ。

「おいその受付。俺が今からこいつら二人と勝負する。…………もし俺が勝ったら、俺を遊撃士とやらに認定しろ」

『 ええ!? いいの、ミシエルさん!? 』

『 ああいいとも。これでも準遊撃士だったら一発認定出来るだけの権限を持つてるからね。まああたしの自己責任だけど 』

『 で、でも…………… 』

『 それに、あんたら二人を同時に相手にして勝てるようなやつなら大歓迎さ。うちはあんたらが来てもまだまだ人手不足だし……………まず 』

無理だと思っけどね？ あっはっはっは！！」

『K a m e n R i d e D e c a d e』

「はッ！」

ブツカーを剣形態に変形させ、エステルに向かって走るデイケイド。舞台は近場の街道だ。人通りが少ない夕暮れの時間帯なので、戦闘に集中出来るとのことだった。広い街道を踏みしめるその足取りは力強く、決して土が手加減をしているようには見えない。

「エステル！」

「うん！」

すぐ隣りにいたヨシユアがエステルに声をかける。すると、エステルは構えていた棒を降ろし、左手を胸の前へ持つて行くと、目を閉じて意識を集中し始めた。青白い波動がエステルを中心に広がり、栗色のツインテールが緩やかにたなびく。

「こんな時にお祈りか？」

デイケイドは勢い良く右手を振り上げ、隙だらけのエステルに一太刀浴びせようとした。

だが

ガキイイイイン！！

すかさずその間に入り込んだヨシユアが、双剣でデイケイドのブッ  
カーを受け止めた。

デイケイドが上からヨシユアをpushさえている状態になっている。

「エステルはやらせない」

「いい覚悟だ」

途端、ヨシユアは力を込めてデイケイドを押し返した。

デイケイドはそれに逆らおうとせず、衝撃を受け流して後方に大きく退く。

その直後、デイケイドがヨシユアに呼びかけた。

「俺が勝ったら遊撃士になれるらしいが、そういえば負けた時の話しはしてなかったな？」

唐突な問いに、ヨシユアは余裕ありげに答えた。

「……そうでしたね。では……あなたが負けたら？」

「冗談だ。考える必要がない。……なぜなら、俺は負けないからな  
！」

「そうかしら？」

「……なに……？」

デイケイドに言葉を返したのは、不敵な笑みを浮かべたエステルだ

った。

「待たせたわね、ヨシユアっ！……せいっ！」

エステルが胸の前に持って行って行った左手を勢い良く前に突き出すと、エステルを中心に広がっていた波動が拡散していった。

その直後、エステルの頭上にはかでかい白い球体のようなものが出現し、ぱっとはじける。

すると、そのシャワーがエステルとヨシユアに降り注がれる……。

……それだけだ。見たところ、なにも起こらない。

拍子抜けしたディケイドはやれやれと首を振ると、ライドブッカーからカードを取り出した。

「よくわからないが、来ないならこっちから行くぜ！」

『Atakku Ride Blust』

ベルトにカードが装填され、同時にブッカーが銃型に変形。

「ふっ！」ディケイドがその引き金を引くと、銃口から弾丸が吐き出されエステルとヨシユアに容赦なく着弾する。

賭けられた遊撃士資格（後書き）

【勝負の途中ですが、あとがき劇場】

士「……おい……冷静に考えてみれば、二対一はせこくないか」

エステル「なにいつてんのよ。あんたが言い出したんじゃない」

士「それはそうだが……第一、人手不足なら即雇ってくれてもよかったような……」

エステル「……いくら受付のミシエルさんでも、見知らぬ人を遊撃士認定出来ないわよ?」

士「要するに、俺とお前ら二人の勝負がやってみたかったんだな。やれやれ……」

ヨシユア「見せ場といえば見せ場ですしね」

士「いたのかヨシユア」

エステル「あ、ヨシユアいたんだ?」

ヨシユア「……」

二対一

……着弾時に爆炎が広がり、それは二人の体を瞬く間に覆っていた。

「……意外とあっけなかったな」

そう言い、銃型ブツカーを肩に担ぐデイケイド。

だが……

「甘いわよ、土っ！」

その瞬間、煙の中から飛び出してくる人影があった。

長大な棒を両手に構えた エステルだ。

「!?!」

驚いたデイケイドはとっさに反応出来ず、剣型に変形したブツカーを構えることも出来ずにエステルの棒撃をまともに受けてしまう。振り下ろし、切り上げ、突きと三段の攻撃が綺麗に決まり、火花を散らしながらデイケイドは吹っ飛んだ。

「ッ まだまだだ！」

想像以上に威力の高かった攻撃に顔をしかめながら、デイケイドはブツカーからカードをドローする。すぐさまベルトに装填した。

『Final Attack Ride D D D Deca de』

「はッ！」

人以上の大きさのデイメンションがデイケイドとエステルの間は何枚も出現する。

空高くジャンプしたデイケイドはライダーキックを放った。

決まれば一撃必殺のファイナルアタックライド……デイメンションキックはエステルを仕留めんとデイメンションを通過しながら迫る。

……だがその瞬間、にやりと笑ったエステルの周囲に岩石の壁が出現した。

「なっ  
」

デイメンションキックは止まらず、勢い良くその壁に当たる。

なんと、それでデイケイドの勢いは殺され、デイメンションキックが打ち消されてしまった。

「ファイナルアタックライドが打ち消された……！」  
なんだ。

士はそう思っていた。

さっきの銃の威力を無視した突撃といい、異常に威力の高い攻撃といい、攻撃を無効化する壁といい　今まで見たこともない。

どうやらこいつらは、人間でありつつも仮面ライダーとほぼ変わらぬ戦闘力を持っているらしいぞ……。

「　遅い」

「　！　ぐああ！」

気づいた時には遅く、デイケイドは背中に斬撃を受けていた。

ヨシユアか　！？

すぐさま振り返るが、その視界に捉えたのは姿勢を低くしたエステルだ。

「ちっ  
」  
本能的にジャンプし、エステルは棒による足払いをかわす。だが着地を狙っていたエステルは棒の勢いに乗って一回転し、左足で今度こそディケイドの足を払った。

「ぐッ!？」

そこへまるで影のような速度でヨシユアがすがり、両手の剣でディケイドを斬りつける。

「ぐあああああ!」

ディケイドは悲鳴をあげて吹っ飛ぶ。

威力こそ高かった一撃だったが、なんとか立ち上がったディケイドはカードを引いた。

「なんつー連携だ」

そこには仮面ライダーが描かれている。  
勢い良く裏返すとカードを装填した。

『K a m e n R i d e F a i z 』

ベルトから【SMART BRAIN】という3Dグラフィックが表示され、仮面ライダーファイズに変身するための因子がディケイドに充填される。

以前エステルの言う【魔物】を片付けた時に変身した仮面ライダー

……555にディケイドは変身した。

「……! ヨシユア、気をつけて!」

その姿をエステルは知っていた。だからこそその危険性も理解していた。故にヨシユアに注意を呼びかけたのだろう。

パンパン、と手を払う555。

「まずは数あわせだな」

『Attack Ride Auto Bazin』

《バトルモード》

555がカードを装填しバツクルを閉じた瞬間空中から機械音声が響いた。

555専用のバイクは変形し、人型の555支援機となる。その形態がオートバジンバトルモードだ。

それはいつの間にかエステルに急接近し、その重量感のある右手でブローを放った。

「えっ!? きゃあっ!」

その攻撃の直撃こそ棒で防ぐことによつて免れたものの、オートバジンの馬力は馬鹿にならない。証拠に、エステルは体勢を大きく崩してしまっていた。

「エステル!」

その急襲はヨシユアにとつても予想外だったのだろう。前方に555がいる状況にも関わらず、背後で戦闘を行っているエステルとオートバジンに近付こうとした。

が

『Attack Ride Single』

「はあッ!」

555が変身にも利用しているファイズフォンが銃型に変形し、そこから一条の赤いレーザーが放たれる。

「ぐあああっ!」

それはヨシユアの背中に直撃し、装甲がたくさんの火花を散らした。

「ヨシユア！……くっ！」

その光景を見てヨシユアの助けに入ろうとしたエステルだったが、オートバジンの猛攻にそれすらままならない。

……どうやら分が555に勝利始めたようだ。

「おい、ヨシユア」

555がヨシユアに話しかける。

ヨシユアは視線を555に向けた。その顔には焦りの色が浮かび始めている。

「俺は世界の破壊者だ。だが同時に、世界の再生者でもある」

破壊と再生は一蓮托生の関係にある。破壊によって再生は生まれ、再生によって破壊が始まるからだ。

「そんな俺だが、かつては幾つもの世界でその世界の人間を救ってきた」

そう言いながらカードをドロウする。

「そいつらはそいつらなりに大きな悩みを抱えていたんだ。お前らも例外じゃないんじゃないか？」

装填。『Attack Ride Vehicle Mode』

そのカードはオートバジンバトルモードから通常形態であるバイク ビークルモードに変形させるものだった。

エステルに拳を振りかざしていたオートバジンは急速に変形し、バイク形態となつて静止する。

「エステル！ どうなんだ？」

オートバジンとの戦闘をしても、会話は聞こえていたのだろうか

……エステルは無言で俯いた。  
無言は肯定の意を持っている。

「そんなお前らにはこの俺様が付き合っただけでやる！ この世界を救うためにな！！」

悩み。ヨシユアには思い当たる節があった。

ここクロスベルに来た一番の理由　それが士の言う『悩み』に値することだろう。

それを士が解決する？

付き合う？

「んなの……あなたには関係ないっ！！」

ガツンッ！

エステルが自身の得物で、オートバジンビークルモードを上段から叩きつけた。

「なによっ、知ったかぶって！ あたしたちがどんな思いでここに来たかが分かるっての！？　ちゃんちゃらおかしいわよ！」

士　555に敵意のある眼差しを向けながらエステルが思いを吐いた。

「あたしたちの問題はあたしたちが解決する！　あんたが入ってくる必要なんか無いのよっ！！」

ギョーン、という擬音が似合う瞬発的な速度でエステルが555に距離を詰める。

ガキイイイイイン！

555はその棒撃をライドブツカーソードモードで受け止めた。正面から睨み付けるエステルに、555は言葉を返す。

「ところがそうもいかないんでな！」  
そのまま続ける。

「俺は世界を旅する内に気付いたんだ。世界を救うには、その世界の人々を救わなきゃいけないんだってことを！」  
ライドブツカーでエステルを勢い良く押し返す555。

「だから俺はお前らを救う！ ……それが俺のこの世界の役目だ」

「あんた……何様よ！」  
555はその最高のフリを見逃さない。

「通りすがりの仮面ライダーだ！！ 覚えておけ。 ……変身ッ！」  
『Kamen Ride Decade』

顔の前に持っていたカードを裏返し、バツクルに装填。  
555はディケイドに再変身した。

「分かったような顔してっ、ふざけんじやないわよ！」  
ディケイドへ突っ込むエステル。  
ライドブツカーソードモードと何撃か交え、隙を見てアクロバティックな動きでディケイドに得物を叩きつけた。  
よるめくディケイドに、ヨシユアが不意に現れ手に持った双剣で斬りつける。

地面を転がるディケイドに、ヨシユアが語りかけた。

「……あなたの言うことも分からなくはありません。……ですが、これは勝負です」  
彼の言うとおり、あくまでもこれは勝負である。  
例え準遊撃士の資格であっても、賭けられているからには負けられない。

「もちろん、分かっているぜ。ここでやめられちゃ俺だって興ざめだ」  
立ち上がるデイケイド。

「さあ、来いよ。……お前らの覚悟を見せてみる」

「言われなくたってツ!!」  
エステルは高くジャンプし、得物を勢い良くデイケイドに叩きつけてきた。

その攻撃は不意をついた威力のあるものだったが、ライドブッカーにいなされ、逆にエステルは斬りつけられてしまう。

「きゃあつ!?!」

そこでカードをドロウする。

視線をヨシユアに向けると、先程のエステルのように祈りを捧げているかに見える立ち姿で精神を集中していた。

それが自分に対する攻撃の下準備だということを、デイケイドは勘づいた。

「こういう時はこれだな!」

そのカードには、まるで西洋の騎士のようないでたちの仮面ライダーが描かれていた。

『Kamen Ride Blade』

《ターンアップ》

## 決着

デイケイドがバツクルを閉じた瞬間、デイケイドのデイメンションにも似たスピードのトランプを模した障壁が前方に向かって打ち出される。

「せいっ！」

その時、祈りを終えたヨシユアの手先から高速で回転する短刀のよなものがいくつも出現し、デイケイドを仕留めんと襲いかかった。だが、スピードの障壁はそれら全てを防いだかと思うと、半回転してデイケイドを通過した。

するとその姿は西洋騎士のような甲冑に変わっていく。

《アンデット》と呼ばれる怪物を封印するために《BOARD》が生み出した仮面ライダー……ブレイドに士は変身した。

「なっ……！？」

「今度はこっちの番だ」

更に姿を変えた士に動揺するエステルとヨシユアを尻目に、ブレイドはカードをバツクルに装填する。

『Attack Ride Beat』

ヨシユアに対し距離を詰めたブレイドは、ビートの能力で強烈なパンチを繰り出す。

まさか接近戦をしてくるとは思わなかったのか、その攻撃をもろに浴びてしまったヨシユアは大きく飛ばされ地面を転がった。

「このおおおッ！」

その背後にエステルが肉迫する。上段から一気に得物を振り下ろす、直撃すれば意識はないかと思われるほど勢いのある攻撃だった。

だが、ブレイド自身も自らの得物……ブレイラウザーを構え、エステルの攻撃を防ぐ。直後、一回二回と上半身を斬りつけた。

「きゃああああ！」

装甲から火花を散らしながら吹っ飛ぶエステル。

ブレイドはその剣の勢いを殺さずエステル達に背中を向ける。

それを嘲りと受け取ったエステルは、空中で姿勢を変えると両足で地面を蹴り、一気にブレイドに向かって接近する。

「なめんじゃないわよ、こんにゃろおおおおー!!」

……しかし、彼はそんなことのために背中を向けたのではなかった。この行動は素早く次の手を打つための布石に過ぎなかったのだ。

『Attack Ride Time』

その瞬間、エステルの動きがぴたりと止まった。

「え……え!？」

ブレイドに向かって急接近しようとしたその姿勢で空中に静止してしまふ。

このカードは『タイム』。周囲の空間の物体すべての動きを止める効果を持つ。

その物体に攻撃すればその反動が自分に返ってくるというデメリットがあるが、ブレイドにはこれで充分だった。

『Final Attack Ride      B U B U B U B  
Lade』

「うおおおおおおおおおー!!」

キック・サンダーの効力を受けたブレイドの両足が、電撃を纏う。高く跳躍したブレイドは空中で姿勢を変え、ライダーキックを放った。

「くっ……!!」

ブレイドの攻撃が当たる直前にタイムの効果は解除され、そこにライダーキックが直撃した。

「きゃあああああああああああー!!」

エステルは防御態勢を取ることもできずに背中から地面に叩き付けられる。

さすがにこの攻撃を受けた後では動けないようだ。エステルは戦闘不能に陥っていた。

「くそっ……!!」

ヨシユアは分け身で複数の自分自身を作り出し、一斉に高速戦闘を仕掛け始めた。街道の地面がそれに合わせて一斉に巻き上げられ、美しく空を舞う。

先兵はブレイラウザーで斬り伏せたブレイドだったが、続く連続攻

撃を避けられるはずもなく、直撃を受け火花を散らしながら吹っ飛んだ。

続けて、絶影を思わせるような超高速で追撃を加えるヨシユア。すれ違いざまに一閃した剣の軌跡が、鮮やかに空中に描き出される。

「ぐっ、ああああああ!!」

だが、ブレイドは地面を転がりながらもカードを引き、装填した。

『Attack Ride Metal』

瞬間、ブレイドの身体は硬質化し始める。そこに攻撃を加えるヨシユアだが、先ほどのようにブレイドは吹っ飛んだりはしなかった。

「おいおい、痛くもかゆくもないぜ？」

「く、くそっ……!!」

目にもとまらぬ速度で剣戟を加えていく複数のヨシユア。

だが全く動じることなく、ブレイドは悠然としている。

当然だ。このカードは自身を鋼鉄化するカード……機動力こそ落ちるものの、防御面では剣では傷を負わせられないほど優秀なのだ。

「さて……クロックアップで駄目なら、これしかないよな!!」

『Form Ride Faiz Axel』

メタルの効果を受けたブレイドから、ファイズの別フォーム……アケセルへの変身。

今までにないほど急展開な戦闘だが、士はそれになんなく反応して

みせる。

ブレイドの青と白を中心とした色彩は全体的に銀へ。

装甲の多いフォームはスタイリッシュに。

瞳が赤く輝き、仮面ライダー555、アクセルフォームへと土は変身した。

「いくぜ……10秒間だけお前に付き合っただけだ！」

『Start Up』

高速戦闘に移る555。急速にその場から消え去った。その空間に複数のヨシユアが斬りつけるが、空振り。

「は、速い……！」

先ほどの戦闘で土が変身した仮面ライダーカブトの能力、クロックアップはヨシユアに追いつくことが出来なかった。

ならばとブレイドの能力である『マッハ』を使うことも考えたが……

……あれは所詮は音速だ。クロックアップにすら劣るだろう。つまり、ヨシユアとの高速戦を制するには、より速いスピードを得なければならぬ。

その点このアクセルフォーム……これは通常速度の1000倍で行動することが可能な上、肉体限界に関係なく自分の思い通りに身体を動かし、多数相手にも圧倒的なアドバンテージを獲得できるのだ。

ウン

その音が聞こえるたび、分け身が一人づつ消えていく。

その音が5回ほど聞こえただろうか、今度はどこからともなく別の

『Final Attack Ride Fa Fa Fa F

ainz』



その後で、派手に火花を散らして吹っ飛ぶヨシユア。

『Three』

『Two』

『One』

『Time Out』

変身が解けた士は、ギルドの受付 ミシエルにこういった。

「さて……まだ文句があるか？」

門矢士の準遊撃士入りが確定した瞬間だった。

## 遊撃士

「……結局手続きしなくちゃいけないのか」

「あはは、悪いわねえ士　ホント悪いと思　あは、あははははは  
は！」

「……この恨みはいつか返してやるからな」

クロスベルの遊撃士ギルド内。士、エステル、ヨシユアの三人は、  
士の準遊撃士登録手続きを行っていた。

加えて、準遊撃士には各遊撃士ギルドの管轄内で活動する場合、その  
ギルドに従事する旨の書類手続きも必要になるため、実質かかる  
手間は協力者手続きよりも長くなってしまふのだ。

故に、相当な面倒くさがりの士は不機嫌になっていた。

「ごめんなさいねえ。せつかくあんな見事な戦いっぷりを見せても  
らったのに結果的には面倒なことにしちゃって」

ギルド受付のミシエルが士に詫びる。言葉とは裏腹に、ちっとも申  
し訳ないと思っただけなような笑顔を浮かべていた。

「ミシエルさん、嬉しそうね？」

「だろうね。最近はギルドに入ってくる依頼も多くなってるそうだし、  
人手が増えるのはやっぱり助かるんじゃないかな」

「ここ、リベールのどこよりも依頼多いしね。さすがに手配魔獣の  
数はボースより少ないけど」

士が書類と格闘しているその後ろで、会話を交わすエステルとヨシユア。

「なんだなんだ？ リベールだかボースだか知らないが、俺にも分かる話をしてくれ」

書類にペンを走らせながら、会話に割り込む士。

「あ、ごめんごめん。それじゃあ、そうね……士は確か、こことは違う世界から来たのよね？」

「そうだが」

「そこら辺よく分かんないんだけど……どうしてそんなことが出来るの？」

「……紅渡が言うには、俺は世界を救う存在らしい。今まではライダー世界を救ってきたが、それが終わった今、ライダーの有無に係なく世界を旅している」

「先程も言っていました……つまり、この世界はあなたによって救われる必要がある。そういうことですか？」

「そうらしいな」

「そして、そのためには僕たちの問題の解決が不可欠……」

「……」

先程の戦闘中での話を思い出したか、エステルの顔が少し曇る。

「……いや」

だが、士はそれに領かず、ペンを置く。

「あれは独り言だ。……気にしないでくれ」

そう言っつて、書類をミシエルに渡した。

ミシエルはそれに目を走らせる。

「大体、世界を救う存在つてこと自体、あやふやなものだろ？ さつき俺が言っつたのはあくまで勘で、根拠はないしな」

「で、でも」

「了承したよ。門谷士、あなたの準遊撃士認定を、遊撃士協会クロスベル支部長ミシエルの名において行つ。これからあなたは遊撃士として名乗ることが許され、規則に沿い活動することが義務付けられるよ」

ミシエルは書類にサインし、注意事項を説明した。

「ああ、分かつた。詳しいことはこいつらに聞く」

そして背後の二人に振り返る士。

「それはともかく、今日はもう遅いだらう。これからどつするんだ？」

いつの間にか日はもうほとんど落ちており、電灯が点きはじめる時間になっていた。

士はエステル、ヨシユアと別れ、光写真館に戻っていた。

背景幕がかけられている部屋にたどり着き、明かりも点けずに椅子にドカツと腰を下ろす。

とりあえず、今日のところは解散ということで話はまつまり、明日の朝にギルドにて今後の方針を決めることとなった。

方針というのは、もちろん 夏海とユウスケ……じいさんの捜索についてのだろう。

いつもはどの世界でも一緒にいた彼らが、この世界にはいなかった。それは今までにないことで、やはり士も動揺している。

だが、ともに旅をしてきた彼らが急にいなくなるなんてことはやはり考えにくいわけで、そうなると、この世界のどこかにいるというのが一番考えられる可能性になってくる。

その理由は定かではないが……見つけることさえ出来れば、この世界を救うことに集中することも出来るはずだ。

少なくとも、光夏海の祖父……じいさんがいつものコーヒーを淹れてくれなければ、そのやる気は当然起きそうも無かった。

翌日。

光写真館。

朝目を覚ました士は、改めて自分の服装を見渡した。この世界にきた時のままである。

全体的に青い制服、帽子、ホルスターに警棒……。

「これは……警察官だよな？」

士の服装は、その世界での役割を表している。

それに関係した場所で出会いや事件があり、そこから物語が進展していくのだ。

「……ということは、本来俺は……」

警察官になるべきだったのだろうか？

……いや、自分が昨日所属した遊撃士が、この世界では警察的役割を果たしているのかもしれないが……。

そうではなかったとしたら、これはまずいのではないだろうか？

「まったく……」

今回はいつもと勝手が違いすぎる。

ライダーはいない、夏海やユウスケもない、普通の人間がやけに強い……。

どうやら、この世界は一筋縄ではいかなそうだった。

「おっはよーっ士！ 元気してた〜？」

「……お前は相変わらず元気だな」

「な〜に辛気臭い顔しちゃってんのよー。朝からそんなんじゃ今日一日乗り切れないわよ？」

「……」

クロスベル、遊撃士ギルド。

きつい警察官の恰好から、普段の服装に着替えた士は、昨日の約束通りギルドに集合していた。

ちなみに一階、掲示板前である。

「……では、遊撃士の仕事内容を簡単に説明します」

ちなみに、遊撃士には二種類あり、それぞれ正遊撃士と準遊撃士とがあるらしい。

準遊撃士でそれなりの経験を積んだら正遊撃士となり、一人前と認められるのだそうだ。

ここクロスベルは、治安の関係もあり優秀な遊撃士が詰めているため準遊撃士は一人もないという。

もともと、士は《協力者》という肩書きが気に入らなかったために遊撃士を志望したわけであって、そこは大して気にしなかったのだが、夏海やユウスケのこともあるので今後はスリーマンセルとなっ

て活動することになったようだ。  
つまり、士はエステルヨシユアパーティーの補充要員ということになる。

「遊撃士は、民間人の安全と地域の平和を第一に考えて行動します。基本的にはその掲示板に出ている依頼を請け負うのが通常業務ですが、現場での突発的な事件への介入もその内となっています」

「ちよつと待て」

いきなり長文での説明が始まる。士は頭を抱え、ヨシユアにストップをかけた。

「もうちよつと簡単に説明しろ。俺は長文が嫌いなんだ」

「……あなたのお仲間を探すような民間人の依頼から、魔獣退治まで幅広くこなす民間の協会です」

「やれば出来るな」

「……」

「ま、そういうところね。じゃあ早速士の仲間さん達を探しに行く？ 今からなら一日使って探せるけど……」

本来、遊撃士協会クロスベル支部の一員であるエステルとヨシユアは、その優秀さも相まって多忙であるため一つの依頼……それも人探しに一日掛けることはない。

だが、今日は士が遊撃士になって初仕事の日だということ、士自身が少々特殊（恐らく『変身』のことを言っているのだと思われる）

であり、遊撃士協会としても詳しい話が聞きたいということで、特別に二人がフリーになることを許されている。

「それもいいが……俺としてはもう少しこの世界を探索したいところだ。どうもこの世界は、今までとはどこか違うんでな」

仲間の不在、ライダーでもない普通の人間……エステルやヨシユアの異常な戦闘力、世界ごとの役割を無視した展開……これらは間違いないと今までと異なる部分だ。

これがなにを原因として起きているのかは不明だが、この世界をより知ること、その一端でも解明出来れば都合がいい。

ついでに、夏海やユウスケについてもなにか分かるかもしれない。彼らのために積極的に動くより、こちらの方がいいと判断したのはそのためだ。

「ふーん？ そうなんだ。前言ってた……ライダー？ だっけ？ それがないこととか？」

「それもあるが、お前らの尋常じゃないパワーが一番不可解だ。ライダーでもないのになんでそんなに強いんだ全く」

「ああ、それはきつとオーブメントが理由ですね」

「……『オーブメント』？」

「それについてはまた今度話したげる。ね？ ヨシユア？」

「……？ う、うん」

ヨシユアが口にしたことが少し気になったが、エステルが口止めし

たので追及はしないことにした。いずれ話すとのことだし、実際分かったところでどうしようという気もない。

「じゃあ掲示板で依頼でも見つけて、士に遊撃士の仕事のなんたるかをレクチャーしちゃうわよ」

「そういうことはヨシユアに頼みたいもんだ」

「あ、あんですって〜!?!」

「はいはい、ストップ。依頼見つけましょうね先輩のエステルさん」  
もう土とエステルのドタバタにも慣れたようで、すかさず仲介に入るヨシユア。こういうことは得意なようだ。……というより、エステルの尻拭いの方が得意に見えるのだが。

「む〜……そ、そうね。こんなことに本気になってちゃ先輩の名が廃るってもんだわ……えっと……」

そう呟き、掲示板を眺めるエステル。その様子は慣れたもので、貼り付けられた用紙を隅から隅まで確認し、時には手に取り、時にはチエックの証なのだろうか、ペンで印をつけたりしている。

それらの作業が一通り終わると、エステルがゆっくりとこちらに振り返る。だが、なぜかその表情は優れなかった。

「? どうしたの、エステル?」

「うーん……それがねえ……土向きの依頼が一つしかないというか……それ以外の依頼はどうも時間が掛かりそうで」

「見せてみて」

そう言い、ヨシユアがエステルの手元を覗き込んだ。いつの間にか彼女の手元には手帳が握られていて、ヨシユアはそれを確認するかのように目を通す。

「……そうだね。かかるにしろかからないにしろ、まずこれからやるのが妥当だと思うよ。場所も近いし、特に問題も無さそうだしね」

「そっか。じゃあこれに決定ってことで！」

士に改めて向き合ったエステルは、右手を天高く突き上げお気楽にこう言い放った。

「それじゃ、手配魔獣退治にレッツラゴー」

士の初仕事が始まるうとしていた。

## 丁の苦惱／比べっこ

士、エステル、ヨシユアの三人は、遊撃士ギルドを出て駅方面へ向かった。

エステルが言うには、今回の依頼は「手配魔獣退治」というらしい。なんでも、特に強力で、放っておくと民間人に危害を加えかねない魔獣を、戦闘のエキスパートである遊撃士が退治するという依頼のようだ。

つまりは戦闘のみの依頼なので、一日のウォーミングアップ代わりに受注する遊撃士も少なくないという。

「魔獣……つてのにも弱いやつと強いやつがいるってことが」

市内を歩きながら士が呟く。

「そうですね。街道を民間人が歩く際は、大抵護衛が同行してくれるのですが、その護衛でも手配魔獣レベルは手を焼くことでしょう。普通の魔獣ならば問題はないでしょうが」

「でもクロスベルにはバスが通ってるから、実質街道の魔獣を退治する意味って薄いよね。むしろネット用のケーブルの安全確保のために、ジオフロントの依頼が出ることが多いわよ」

「でも、前みたいにバスが故障する事もあるしね……あの時は間に合ってたよ」

「要するに、強い魔獣が出たらやつつけてくれって事だろ？ 遊撃士は随分な便利屋なんだな」

「便利屋と言えば聞こえは悪いけど、遊撃士は立派な職業よ。市民の役に立てるこの仕事に、あたしは誇りを持つてる」

「……そうか、そりゃ結構だ」

三人は駅前に差し掛かった。先頭を歩いていたヨシユアが振り返り、士に話かける。

「……以前ここを通った時はまともに話が出来ませんでしたね」

どこか真面目な面持ちのヨシユア。

ここを通った時……そう、ヨシユアに決闘を申し込まれ、ジオフロントに移動したあの時だ。ここを右折すると階段があり、行き止まりの扉を開くとジオフロントに入れるはずだった。

「もうその話はいい。よくあることだ」

少なくとも『士にとっては』であるが。

「士！ ここはクロスベル駅っていうの。電車っていうのが走って、遠くまであつという間に移動できちゃうのよ！」

そんな会話の流れを断ち切るように話を変えるエステル。

そもそも、この件は一度ヨシユアが謝ることで終着している。原因も彼にあるわけではないし、士としてもエステルの厚意はありがたかった。

基本的に、シリアスな雰囲気苦手なのだ。

「それくらい俺の世界にもあつた。そんなもんで威張られちゃ困る」

ニヒルな笑みを浮かべ、返事を返す土。

「む、むむう……。じゃ、じゃあ飛空艇は！？ 空を飛ぶ乗り物よ！ 土の世界にそんな高尚な物があるわけないわよねえ？」

こちらもニヒルな笑みを浮かべる。どことなく扇情的にも近い笑みだった。

「甘いな。そんなもん通り越して、こっちには飛行機がある。飛空艇のスピードじゃ勝負にならないな」

なんの勝負なのだろうか。

なっ……。なにそれ！？ エステルが聞き返し、めんどくさくなったのか適当にあしらい始める土。やはりというかなんというか、この二人は気が合うようだ。

ヨシユアはそんな二人に苦笑いを浮かべると、それがひと段落するまで優しい眼差しで見守るのだった。

駅前を抜けると、そこには平原が広がっていた。見渡す限りの緑、なだらかな丘、所々に点在する池。そよ風はそこに立つものの髪を優しく撫でて去っていく。天気もいいせいか、自然と活動的なテンションになるような、そんな場所だった。

「ここは東クロスベル街道。クロスベル自治州外に出るための一つのルートで、アルモリカ村という農村に続く道でもあるわ」

「基本的に魔獣が生息しているため、気は抜けません。……しかし、最近では交通手段が発展し、車でここを移動する人も多いため、直接魔獣の被害を受けた、という例はほとんどないようです」

「この街道に、その……手配魔獣？　がいるのか？」

「そうね。結構長いけど、ゆっくり歩いても1、2時間つとここで片道が終わるから、気長に歩いて、目標を見つけ次第退治するわよ  
士が」

「俺が!?!」

「遊撃士としての初依頼なんだもの。当然一人で出来るわよねえ？」

「あ、もし危なくなったら助けてあげるから安心してね」

「……………」

助け舟を求めるかのように無言でヨシユアに視線を移す士。  
だが、ヨシユアの発した言葉は士の予想を綺麗に裏切った。

「大丈夫ですよ、ただの討伐依頼です。僕たち二人を相手に勝利を収めたあなたなら問題ないでしょう」

その言い方に、士はなにか引つかかるものを感じた。ヨシユアの言い方には、自嘲めいた響きがなかったのだ。

……となると、もしかやあの戦いは二人が手加減をしたのか……？

……今考えても仕方のないこと、か。そうであってもそうでなくても、士が遊撃士になれた事実は変わらない。この世界のことをもっと知るといふ目的のためには、そんなことはどうでもよかった。

ただ、初めてエステルに会った時に遭遇していた魔獣　あれが仮に『普通』の魔獣ならば、話によると手配魔獣はあれらよりも強力なはずである。

つまるところ、手間がかかる。士は思わずこう呟いていた。

「…………ちっ…………めんどくさいな…………」

彼は遊撃士に向いていないのではないだろうか。

## 丁の苦惱／比べっこ（後書き）

タイトルから、手配魔獣戦に使われるカードが予想できるかと思  
います。

そこらの詳しい設定などは次話投稿後に解説予定です。

## Tの苦惱/Wは止まらない

それから、三人は東クロスベル街道を歩き始めた。

小型の魔獣は時々見かけたが、エステルとヨシユアはなるべく見つからないように移動しているので、戦闘になつたのは1、2回程度だった。それも先制攻撃から一気に畳み掛けていたので、士は手を出す必要すらなかった。さすがは戦闘のエキスパート、相手に瞬きする暇すら与えない。

目標である手配魔獣を見つけたのは、アルモリカ村に続く道と自治州外に出るための道に別れる三叉路のそばだった。

「あれです……目標は一体。あの蟹型の魔獣がそうです」

ヨシユアが後ろの土に呼びかける。

三人は木の影に隠れながら、大型の魔獣の様子を窺っていた。

「あいつを倒せばいいんだな？　しかし妙な魔獣だ」

「あのタイプの魔獣は確かに珍しいわね。鍾乳洞とかならともかく……ま、とにかくあれが依頼にあつた手配魔獣、『バブリシザース

G』よ」

「ちなみに、僕たちは以前にあの魔獣と戦闘を行っていて、その時詳細なデータを得ています。もし必要であれば、今からでも提供しますが……」

ヨシユアの言葉に、士は少し考えるような表情をする。

先ほどのエステルとヨシユアの話によると、この魔獣は前回士が戦

ったものよりも強力であるらしい。  
普通ならばヨシユアの厚意に甘えるところだろうが……。

「断る」

「へえ……」「……」

意味深な笑みを浮かべるエステルと、やはりか、と言いたげに苦笑いを浮かべるヨシユア。

「あなたならきつとそういわれると思っていました」

「ふん……俺だって伊達に世界の破壊者を名乗ってるわけじゃない。見てろよ、五分で終わらせてやる」

言い終わった直後、士は勢いよく立ち上がりライドブッカーからカードを引く。

独特な音とともに引き抜かれたのは、マゼンタと黒の混合色で構成される仮面ライダーの絵。

「変身ッ！」

そのカードを手の中で反転させ、デイケイドライバーにスロットさせた。

『Kamen Ride Decade』

すると、ドライバーから合成音声が流れ、士の周囲に灰色のダイヤモンドシオンホログラフィックが幾重も現れた。

それらは土に重なり……鏡が割れるようなエフェクトと共に、士は

変身 仮面ライダーディケイドへと変身した。

「らあああああー!!」

と、同時に士は手配魔獣……バブリシザースGに向かって駆け出した。

「（なんていうか……毎回見るたびに思うけど、あれは一体なにがどうなって姿が変わるんだろ？ ヨシユア？）」

「（……土さんの言う通り、彼が別の世界からの来訪者なら、その原理が僕たちには分からないのも当然だ。ここで考えたって仕方ない。けど……）」

「（……？ けど……？）」

「（……なんでもない。……あ、土さんが会敵したみたいだよ）」

「はあッー!!」

最初の一撃は、ライドブッカー・ソードモードによるディケイドの一閃だった。

そのまま続けて、魔獣が振り向く前にその背中を二撃三撃と斬りつける。

その甲殻は蟹だけになかなか硬いようだが、効果はあったらしく魔獣は体制を崩してよろめいた。

だが、それは一瞬のことで、魔獣は振り返るときの勢いを利用し、その巨大なハサミでデイケイドを殴りつけた。

吹っ飛ばされ、街道を転がるデイケイド。

「土っ!？」

エステルが思わず駆け寄ろうとするが、それをヨシユアが制する。

エステルはなぜ止めるのかと視線で訴えるが、ヨシユアの冷静な瞳を見て気づいた。

「(……そっか……ヨシユアは……)」

「まったく……見た目通りの馬鹿力だ」

デイケイドは立ち上がり、手をパンパンと打ち合わせた。

「なら、新しい力を試させてもらっぜ？」

そう言い終わる直後、魔獣はその巨体に似合わぬ速度でデイケイドへ迫り始めた。が、銃型に変形したライドブッカーに牽制され動きを止める。

その隙を逃さず、デイケイドはカードをドロ―した。

そこに描かれているのは、顔の左右で色の違う、首からマントをたなびかせるライダー。

トントン、とそのカードの側面を叩くと、ドライバーに装填した。

そこで怯みを終えた魔獣が再び両のハサミを大きく広げて襲いかかろうとする。

だが、それを見越していたデイケイドはカードの装填中にも関わらず弾丸を発射して魔獣を牽制した。

それらの弾群はいくつも直撃し、その巨体は後方に押し戻される。

『W』

バックルを閉じた瞬間、周囲に風が吹き荒れた。

その勢いは周囲の木々を大きく揺らすほどだ。……魔獣もその異変を感じ取ったらしく、周囲をキョロキョロと見まわし始める。

「か、風……？ 土、いつたい何を……」

たなびくツインテールの髪を片手で抑えながら呟くエステル。

デイケイドが竜巻に包まれ、視界が開けた時 その姿は変わっていた。

風舞い人情に厚い町、風都を守る仮面ライダー……ダブルに土は変身したのだ。

「な、なにあれ……！ また見たことない姿に変わったわよ！？ しかも右と左で色が全然違う！」

「……風……」

エステルとヨシユアの声は無視し、両腕を回しストレッチをするW。最後に軽く首を回すと、クールにこう言い放った。

「さーて……風を浴びたいなら俺に言えよ？ 天空まで吹き上げてやるぜ」

そこで痺れを切らしたのか、魔獣がWに向かって猛突進を始めた。Wはその突進をひらりとかわすと、ガイアメモリ『サイクロン』の効力を得ている右拳を魔獣に叩きつけた。命中箇所から風がふぶき、再び周りの木々を揺らす。すると、魔獣はデイケイドに攻撃された時に比べ大きくよろめいた。その感覚を確かに掴む土。

「なんだお前、もしかして風が苦手なのか？ てつきり焼かれるのが苦手だと思ってたぜ」

そう言うと、さらに右足での回し蹴りを決め、続けて先ほどと同じように拳を繰り出した。

魔獣はその勢いで大きく後退する。効いているのは確かだった。

……だが、魔獣もやられているだけではなかったようだ。大きくハサミを広げると、口から無数の泡をWに向かって吐き出した。

バブリシザースGの得意技である。その見た目に似合わずダメージが高く、まともに受ければ小型の魔獣ならば戦闘不能に陥るほどだ。Wはそれを確認すると、素早くカードを引き、装填する。

『Form Ride W Cyclone Trigger』

Wの身体に一筋の光が地面と垂直に走り、それはWの半身 黒色、つまりジョーカーの位置をなぞった。

すると、黒色だった左半身は鮮やかな青色に変わり、その手には銃が握られる。

「わ！ わ！ 見て見てヨシユア！！ また変わったわ！ こ、こ  
こまで来ると……」

「……？ 来ると……？」

「サイツコーに格好いいわねっ！！」

「……」

## 解説回

今話では、趣向を変えて世界観や設定の解説などを行っていきたいと思います。

本来こういった小説でこのようなものは無粋と考える方も多いとは思いますが、原作の仮面ライダーディケイドとは変更した設定もありますので、その旨解説しておきたいと思ったこと了承いただけただけから幸いです。

## 世界観解説

本小説の冒頭でも説明した通り、仮面ライダーディケイド……門谷士が世界の移動によって辿り着いた世界が『零の軌跡』の舞台であるクロスベルとなります。

本来ライダーの世界を旅していた彼は、9つのライダー世界を巡り全ての力を取り戻した後、それらの世界を救っただけではディケイドの旅は終わることはないということを知り、その後も世界を救う旅を続けていました。

そこで、本小説のオリジナル設定として、彼はその過程で『Wの世界』を訪れた、としています。

## Wの世界

原作の『仮面ライダーW』とは違った登場人物が世界を織りなす【リ・イマジネーション】による世界であり、そこでは仮面ライダーWが登場しました。

士はその世界を訪れ、数々の苦難を乗り越え、無事世界を救うことに成功しました。

そしてその結果、彼は仮面ライダーWの力を手に入れたのです。

ディケイドとは？

ご存じの方も多いとは思いますが、彼は自身の力だけでなく、9つの仮面ライダーの力を利用して戦います。

その多様な形態変化が紡ぐ、圧倒的な戦闘力は他の仮面ライダーの追隨を許さないものであり、故にディケイドは『世界の破壊者』と呼ばれています。

しかし本小説では、そのライダーの力が1つ増え、10の仮面ライダーの力を使用します。

仮面ライダーWの力

仮面ライダーWは、本来右半身と左半身で2人に別れています。

つまり、1つの身体を2人の意識が操っているのです。

ですが、士はその力を1人で使いこなし、Wの特徴である『フォームチェンジ』を行うことも可能なのです。

そのフォームの組み合わせは実に11通りにもなります。

属性について

仮面ライダーの力の中には、龍騎の『ストライクベント』、ブレイドの『サンダー』のように特徴的なものが存在します。

それらは【軌跡の世界】ではその世界のルールに従って、【属性】

が付与されています。

即ち いえ、これは説明の必要もありませんね。

到達可能な世界？

仮面ライダーディケイドは本来仮面ライダー世界を旅するライダーであり、その過程でライダーの存在しない世界への行き来が可能になっています。

しかしディケイドが到達できる世界は、それでもライダーと身近な世界ばかり。

彼はなぜ、ライダーとなんの関係のない【軌跡の世界】に来たのか？ あるいは到達出来たのか？

本作一番の謎はこれに尽きます。当然理由がありますので、興味のある方はご一考してみても如何でしょうか？

最後に

『零の軌跡』は、そのストーリーもさることながら、迫力のある戦闘シーン、強大な力を持つ登場人物が魅力のRPGです。

その点を生かし、仮面ライダーディケイドとうまくコラボレーションさせていきたいと思っています。

読者の皆様、よろしくお願いします。

## Aランチタイム

「ふっ！」

左手に握られた銃をバブリシザースGに向け、引き金を引くW。その銃身からは鋭い風の弾丸が放たれる。

それらはバブリシザースGの口部から撒かれた泡に命中し、小規模な爆発を引き起こす。

だが、Wはなおも引き金を引き続ける。攻撃モーションのままのバブリシザースGは避けることも叶わず、風の弾群に甲殻を削り取られた。

ダメージは相当高いのか、両のハサミで顔を覆う。

『Final Attack Ride Da Da Da W』

Wは両手で銃を構えると、バブリシザースGにゆっくりとポイントした。

同時に、次第に高まっていくチャージ音が響きはじめる。

だがもちろん、銃撃は止まってしまっているため、好機とばかりにバブリシザースGはハサミを天高く掲げWに向かって突進した。

「はあッー！」

Wまであと一歩、というところで銃口からエネルギー弾が解き放たれる。

どんな壁をも切り裂き貫く大型の風の弾丸……トリガーエアロバスターだ。

その弾丸はWのまさに目前まで迫っていたバブリシザースGの胴体

を貫く。と同時に、バブリシザースGは爆散した。爆風が吹き荒び、Wのマントが激しくたなびく。爆炎の中では、Wの紅い瞳が輝いていた……。

「……す、すごい……」

「……魔獣相手にも渡り合えるなんて……」

その光景を見て、絶句するヨシユアとエステル。

風は次第に収まり、周囲は元の静かな草原に戻っていった。

「まさか、一人で倒したの？ あなたが？ へええ……」

「だから言っただろう、俺にはこんなこと朝飯前だとな」

「んなこと言っただけでしょ」

「言ったようなものだ」

東クロスベル街道から戻り、クロスベル市内東通り、遊撃士ギルド。

士たち三人は先ほど倒した手配魔獣の依頼の顛末を報告しに来ていた。

受付のミシエルは、士が一人で手配魔獣を倒したと聞いて驚いているようだ。

「いくら手を抜いていたとは言え、エステルとヨシユアに勝ったのは伊達じゃないってことね」

「……やはりそうか」

「えっ、えっ？ 気づいてたの？」

士のお見通しと言わんばかりの呆れ顔に、エステルが聞き返す。

「当然だ。第一、お前らが本気になってかかったら連携力はあんなもんじゃないだろ」

エステルとヨシユア。

二人は、前の世界で出会ったある二人によく似ていた。

彼らはどんな時も互いを信じていて、認め合っていた。故にその連携力は凄まじく、絶望的な状況を打開するほどであったのだ。

エステルがヨシユアを見る目、ヨシユアがエステルを見る目は特にあの二人に似ている。

普段の彼女らの掛け合いや仕草からも、互いを信じ合っているのがよくわかる。

恐らく相当な修羅場を潜り抜けてきたのだろう。だから、あの二対一の戦いには納得がいかなかった。

「いいか？ もし次があるなら その時は本気で来い」

二人の目を見据え、士にしては珍しく真面目な顔でそう言った。

……負けず嫌いは相変わらずのようだ。

「んふふ……はいはい、わーっ たわよ」

「わかりました」

やけに楽しげに笑みを浮かべるエステルと、涼しげなヨシユア。

「ふん……デイケイドめ、せいぜい今を謳歌するがいい」

ギルドの外で、つばが丸い帽子と丈の長いコートを羽織った人影

鳴上が、一人なにかを呟いていた。

「ここが……この『ライダーを受け入れない世界』こそが、貴様の

墓場となるのだからなッ！ ふ、ふははは……はーっはっはっはっは！

彼はひとしきり笑うと、霧の壁に透過し消えていった。

「しかし、依頼をこなせば金が手に入るとはな。遊撃士は民間の組織じゃなかったか？」

クロスベル市、中央広場。

士たち一行は、ギルドから出て次の依頼のために移動しているところだ。

「その通りです。しかし、士さんは勘違いしているようですが遊撃士は慈善事業ではありません。職業として認められていますし」

「ちゃんとお給料だって貰ってるのよ？ ほとんどが依頼を完了した時の報酬だけだね」

「なるほど、大体わかった」

「……士がそう言う時って、実はなににもわかってないんじゃない？」

「それで」

エステルという言葉を遮るように強めに発言し、歩みを止める士。

「俺たちはどこに向かっているんだ？ まったく、この街は広すぎて今自分がどこにいるかもあやふやだ」

「最初は誰でもそうですよ。ここ クロスベルは一国の城下町以上に広いですからね。ちなみに、僕たちが目指していたのはここ、中央広場です。依頼人との待ち合わせ場所なんですよ」

士は周囲を見渡す。

まず目に入るのは中央にでかかど建てられているなにかの記念碑だ。

次いで、そのそばにあるまるで大型のデパート。確かにここは、この広いクロスベルの中央と呼ぶに相応しい場所のようだ。

「なるほどな……で、その依頼人はどこだ？」

「うーん……ちょっと待ってて下さい」

そう言い残すと、ヨシユアは周辺を歩き回り始めた。

周囲の人影を確認し、デパートや他の店などにも足を運んでいる。

一通り終わるとヨシユアは戻ってきた。

「いませんね……もしかしたら依頼人の都合がつかなくなったのかもしれません」

「依頼しておいて、か？」

「稀にこういうこともあります。他の誰かを頼ってるのかもしれないし、急用が来たのかもしれない。もちろん、まだ来ていない可能性もありますが 既に待ち合わせの時刻は過ぎてますし……」

「まっ、しょうがないわよ。それに丁度よかったじゃない？」

にこにこしながら話すエステル。こんな時でも相変わらずのようだ。

「丁度？ ……なにが」

士が聞き返すと、エステルはパチン と可愛げのあるウインクをしてこう言った。

「お昼ご飯にしましょっ！」

カフェレストラン、《ヴァンセット》。

中央広場に面した唯一のレストランで、故にランチタイム、ディナータイムは相当に混雑する人気店だ。

店内は広々としていて、二階席も用意されている。

その二階の四人掛け用のテーブルに、士、エステル、ヨシユアの姿があった。

テーブルの上には豪華なステーキが三人分用意されている。

「んん〜……！ 美味しい！ 王都の南通りのレストランにも負けてないわね……さすが中央広場に店を構えるだけあるわ！」

と、口の周りに肉汁をつけながら絶賛するエステル。

「エステル、口」

拭き取り紙を渡すヨシユア。

「全く、食事くらい静かに出来ないのかお前は」

士がそう指摘すると、エステルが拭き取り紙で口を拭きながら「むっ」とした表情をした。

「だったら食べてみなさいよ。噛んだ瞬間肉汁がじゅわわ〜って、そりゃもうすごいんだから」

「言われなくても食うさ」

そう言つて、切り分けたステーキを口に運ぶ士。静かに咀嚼し、飲みこんだ。

……ゆつくりと顔をあげ、エステルと目を合わせると、「……デリシャス！」と感嘆の言葉を漏らした。

「……土つて、実は天然？」

「なんて美味いんだ……A級ランチでもこんな美味しいのは食べたことがない！」

「え、A級？」

聞きなれない単語が出てきて聞き返すヨシユア。真っ先に思い浮かぶのは遊撃士のことだが、この場面でそれは違つたらう。その時だった。

突如、レストランの一階部分、正面玄関の扉が勢いよく開かれた。異音に振り向くエステルとヨシユア。土は呑気にステーキを咀嚼している。

そして、その扉から出てきたのは……紫色の姿をした、右手に杖のようなものを持った……？

「あ、あれって……土！」

「土さんに似ている……！」

彼らがそう思ったのは、素顔や身体を覆うスーツが土の変身時と酷似しているからだろう。

「おいおい、冗談だろう」

二人がその人物に目が釘付けになっているところに、その間に立つように土が一階を覗き込んだ。

「あんなのと一緒にしてもらっちゃ困る。第一、色も形も違うだろうが」

「……っはあく……さあて、祭りの始まりだ」

その紫色の人物は杖を掲げたかと思うと、そこから一条の光線を土に向け放った。

「!?!」

そばにいたエステルとヨシユアは咄嗟に回避行動を取るが……土は一向にそこから動こうとしない。

「土!」「土さん!」

『Kamen Ride Decade』

激しいスパークと、鳴り響く合成音声。

思わず両腕で目を庇うように構えた二人がその目に捉えたのは、黒焦げになる土ではなく、既に変身を終えたデイケイドだった。

「俺のランチタイムを邪魔するとはいい度胸だ……蛇の丸焼きにしてやるぜ!」

紫色の戦士……仮面ライダー王蛇はディケイドのその掛け声に呼応するよつに身を震わせると、一気に二階部分へジャンプした。

## Aランチタイム（後書き）

お待たせして申し訳ありませんでした。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4960o/>

---

仮面ライダーディケイド～軌跡の世界

2011年12月8日02時00分発行